

アサギマダラマーキング

10月の特別活動は、海を渡る蝶、アサギマダラのマーキング大会です。今年は暑い夏が彼岸のころまで続いたせいか、10月を迎えてもフジバカマの花が蕾のまま、アサギマダラの群れは観察されず、淋しいマーキング大会となりました。結局昼過ぎまで待つ捕えた蝶は一頭のみ。それもマーキングのための測定に入ったところで、私が逃がしてしまい記録ゼロ。なごや環境大学の講座で相生山を訪れた

親子連れも阿部さんの解説を聞くのみとなり、楽しみに訪れたマーキング大会も残念なことになりました。

一方、当日フジバカマの畑の横で、冬の野菜のための畑起こしと種まきも行いました。こちらは、村田さんの熱意で開墾されたジャガイモ畑の後に、大根とかぶらの種をまき、春の萌木祭りで食の愉しみの材料となります。お楽しみに。
(大館)



▲アサギマダラの説明を受けるなごや環境大学の講座参加者の皆さん



マーキングされたアサギマダラ (昨年のものですか...)

10月定例活動

第12回どんぐり祭り

秋の恒例イベント「どんぐり祭り」は、暑くも寒くもなくほど良い天候のもと、今年も盛り上がりました！



▲祭りの全景

木に登り、伐採した木を移動して採集したどんぐりを、このため、ナデ場が使用



▲丸太切りに挑む我が子を前に親御さん達も力が入ります。



▲サツマイモ掘り体験も親子に大人気でした。



▲柴刈り体験は、集いの広場のすぐ脇で行い、たくさんの親子が参加しました。

▼掘ったイモは、もちろんその場で焼いて早速いただきました。



▲自分で色付けたハ事の蝶々は絶好のお土産に。

シリーズ『森の住人たち』②⑥

～ オオカマキリ (大蟻螂) その2 卵鞘 ～

—ただいまカプセルのなか—

「まるでソフトクリームのように…」オオカマキリが産卵する場に偶然立ち会って思った。頭部を下にしてジュズダマの茎に、産卵管から淡いクリーム色の泡状物質をだす。ゆっくり、ゆっくり、円を描くようにふわふわの気泡が搾り出される。やがておなじみの変形おにぎり状の卵になった。サイズは35mm前後だろうか。時計を見ると3時間程経過していた。

オオカマキリの卵は、冬枯れの景色に馴染む薄茶色である。植物の茎に産卵することが多いオオカマキリの「カモフラージュ作戦」なのであろう。スポンジ構造は、防寒・断熱効果があり、外気温度

の変化に左右されない構造になっている。防寒に優れ、雨や雪にも耐えて一冬を越すためのものである。観察会では参加者が、お吸い物などの具財の焼麩に似ているとか、いやいやウエハースに似ているとにぎやかな会話になる。カプセルには多数の卵がぎっしり並んで、誕生する日を待っている。ただし幸運に冬を越すことができればの話である。

強敵はいつでも、どこにでもいる。たとえばカマキリの卵を食べるカマキリカツオブシムシという甲虫がいる。あるいは、シジウカラなどの野鳥が狙う。それぞれが生きていくために必死で食べ物を探す。

オオカマキリ カマキリ科
大きさ 35mm前後
分布 北海道、本州、四国、九州に分布



▲オオカマキリの卵鞘

オオカマキリの産卵を観察していて、オーダーしたソフトクリームを待つ気持ちにどこか似ていると思った。今は、ただただ多数の赤ちゃんが無事誕生することを祈る。明るい陽射しのなかで誕生するその数、約200～300個体。

(文責 自然案内人 近藤 記巳子)